

広報

あかいけ

4

目の前で息をしている
山の谷間で人知れず咲き、そして散り、六百年も生きてきた。

年輪を重ね、苔むした「虎尾桜」の太い幹。

春の訪れとともに鮮やかに変身する。

その内に、かけがえのない生命の美しさを秘めている。

そんな大樹と向き合う瞬間、いつも胸が熱くなる。

こちらが見ていると言うより、木に見られている感じがする。

桜並木にも勝る、ただ一本の強さ、美しさ。

孤高の桜が、この町にたたずむ

山の至宝を守る

特集

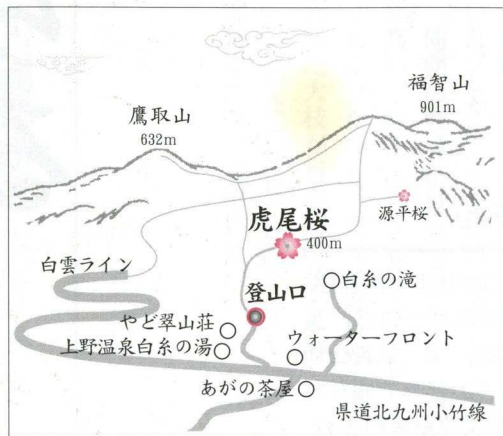




エドヒガン (江戸彼岸)

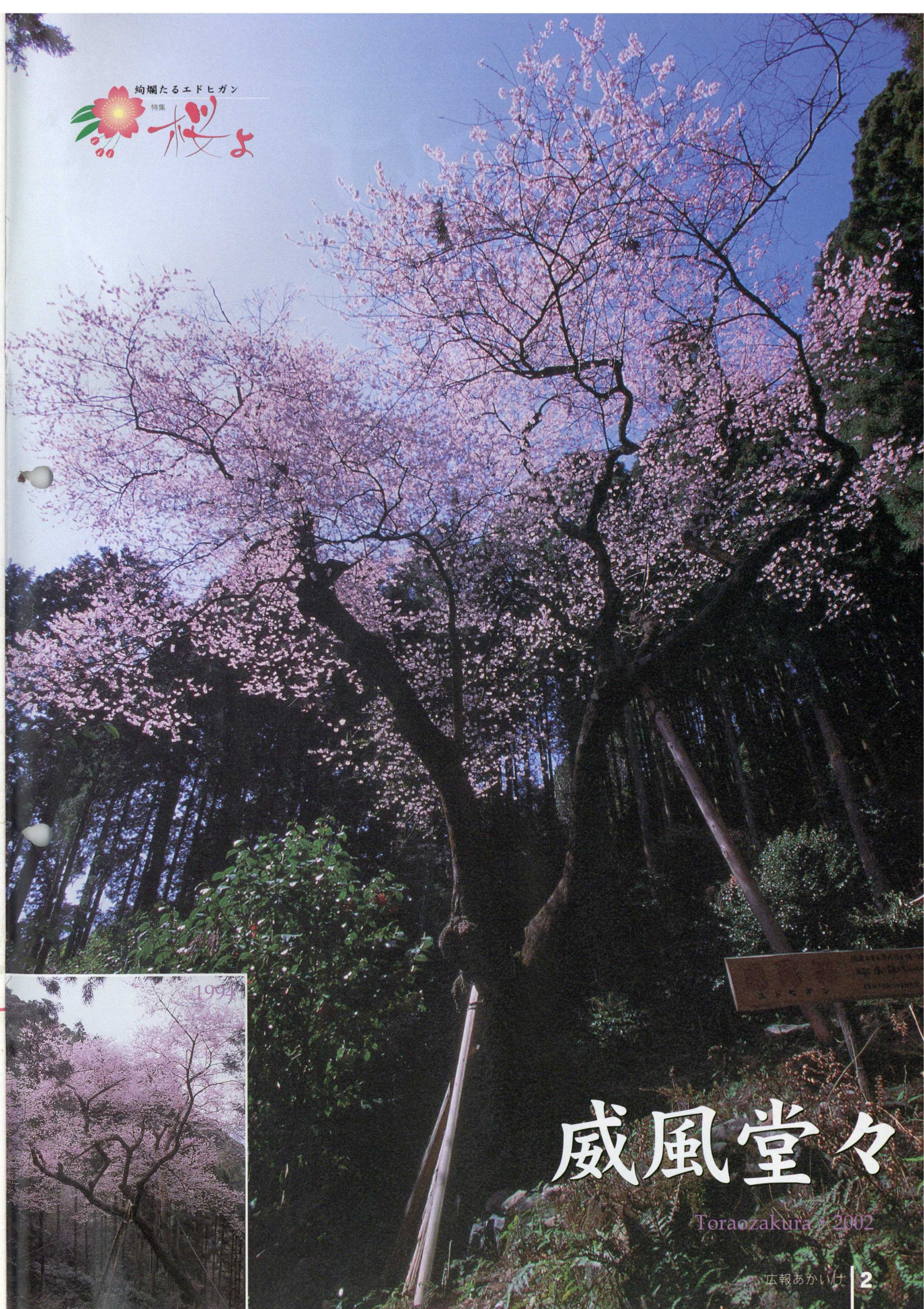
ウバヒガン (姥彼岸) とも呼ばれる。本州・四国・九州・中国大陸にかけて分布する。国の天然記念物に指定された桜の多くは、このエドヒガンで、花見の名所となる大木が残っている。葉が開く前に、やや小振りで一重咲きの花を咲かせる。開花は3月下旬から4月上旬にかけて。(写真は虎尾桜)

木漏れ日が心地よい福智山の春。
 推定樹齢六百年、県内最大のエドヒガンを目当てに
 毎年二千人以上の花見客が訪れる。
 十数年前までほとんどの人が知らなかった巨木「虎尾桜」。
 今や町のシンボルとなった。
 今回、この桜を保護し、世に広めた
 「虎尾桜を心配する世話人会」の地道な活動をたどってみた



虎尾桜 (とらおぎくら)

桜の種類はエドヒガン。推定樹齢600年。木の高さ23m、幹周り3.83m。添田町の吉木のヤマザクラに次ぐ福岡県で2番目に大きな桜。エドヒガンでは1番の大木。小さめで濃いピンク色の花が特徴。名前の由来は「枝先が虎のしっぽに似ている」など諸説ある。平成12年、赤池町文化財に指定された。福智山中腹の谷間、標高400mに所在し、福智山登山口から徒歩でおよそ20分～30分、700m登った所に在る。右頁は平成14年、同左下は平成6年に撮影したもの。枝落ちなどで樹形が変化してきたことがうかがえる。



威風堂々

Toriozakura 2002

人は絶景に出会った時、大切な人にそれを見せたいと思う。いつまでも、そこに在って欲しいと願う。傷つきながら強烈な輝きを放つ爛漫の虎尾桜。六百年の美しさは、はかなく、そして痛々しかった…

「枯死寸前」巨木が朽ちる

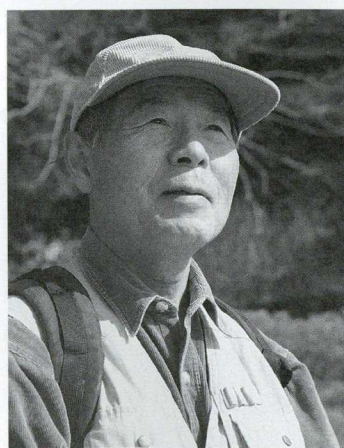
伝説の桜と出会った

「虎尾桜を心配する世話人会」（以下世話人会）副会長の熊谷信孝さん。虎尾桜の存在を知ったのは幼少のころ。地元上野の古老から伝説を聞き、幼心に興味を抱いた。

熊谷さんには忘れられない記憶がある。小学生のとき、祖父に連れられ福智山に登ったときのこと…

途中、驚きのあまり突然足を止めた。目に飛び込んできたのは山肌にそそり立つ巨桜。まだ植林がない当時、せまり来る桜の迫力に圧倒された。

「伝説の桜だ」。そう確信し、その場に立ちすくんだ。地元住民の一部しか知らなかったその桜は、古くから「虎尾桜」と呼ばれていた。

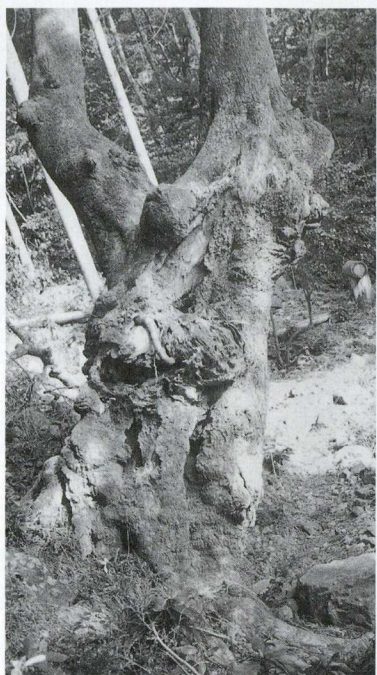


熊谷 信孝さん

●（くまがえのぶたか）下小路在住。世話人会副会長。「香春岳の自然」「英彦山地の自然と植物」「貫・福智山地の自然と植物」などの著者で知られる。元高校教諭、町文化財専門委員。



→杉林の中で咲き誇る虎尾桜。枝部の美しさに反し、根元は腐れが進み、2〜3年で枯死しかねない危険な状況だった。



→幹と根の北西側半分は高さ2メートルまで腐朽し、枯死した状態。最大内径80cmが空洞化。生存部と枯死部の間には亀裂が生じ分離している。



↑ゆるやかな曲線を描く虎尾桜の枝先。文字どおり「虎のしっぽ」を連想させる。



↑発見当時の幹。高温でシダやコケなどが着生する劣悪な環境だった。

まちのエドヒガン・ミニガイド

源平桜



高さ25メートル、エドヒガンの1対。樹齢200年とされ、緋色と淡いピンクの「紅白」の花をつけることにちなみ命名された。虎尾桜からは徒歩40分、500メートル離れたところにある。

傷負ったエドヒガン

「桜の様子がおかしい」。異変に気づいた井上さんと小林さんは、当時の町文化連盟会長・久原弘さんに相談した。「町で一番植物に詳しいあの人に聞くといい」。2人は紹介された熊谷さんに花のついた枝を見せた。

「山桜」だと思っていた熊谷さんは凶鑑を引いて驚く。その花は県内でも珍しい桜「エドヒガン」の花だった。

早速、熊谷さんは調査に向かう。虎尾桜は強い生命力で花を咲かせていた。しかし、その姿は痛々しかった。周囲の杉林に日光を遮られ、湿度が高い。幹にはコケやシダがビッシリとこびりつく。根元は腐れが進み、朽ちた大枝が目の前で落ちた。

「このままでは、枯死してしまう」。熊谷さんはつぶやいた。